

令和5年度

鳥羽川(栗野地区)の植生

～ 故郷には、どんな草花が生えているのでしょうか?! ～

環境学習や保全の参考に活用しながら、継続的に情報を寄せ合いましょう。



◀キバナアヤメとノバラ(石田川の合流地点の河川敷の水際景観)

【5. 5. 9】



◀ヒガンバナ(桜橋下流の左岸堤防)

【2. 10. 3】

令和6年3月31日

岐阜市岩野田北まちづくり協議会

在来種

この報告書では、おおむね明治期以前から日本に生息する種類をいう。



▲スミレ

【4. 4. 5】



▲ノジスミレ

【4. 4. 5】



▲白花スミレ

【4. 4. 21】



キツネアザミ

【5. 5. 8】



▲チガヤ

【5. 5. 9】



▲ナワシロイチゴ

【5. 5. 8】



▲ノバラ

【5. 5. 9】



▲ヨモギ

【5. 5. 8】



▲タケニグサ

【5. 5. 8】



▲チチコグサ

【3. 10. 29】



▲ギシギシ

【5. 5. 17】



▲カワラヨモギ

【5. 5. 9】



▲ツルマンネグサ

【5. 5. 9】



▲コオニタビラコ

【5. 5. 9】



▲セイヨウタンポポ

【4. 3. 25】



▲ギシギシ(紅葉)
【5. 1. 28】



ヨウシュヤマゴボウ
【4. 10. 20】



▲オオマツヨイグサ
【4. 8. 5】



▲ヒメコバンソウ
【3. 5. 23】



▲コバンソウ
【5. 5. 8】



カラスノエンドウ
【4. 4. 4】



▲ナズナ
【4. 4. 8】



▲ヒメオドリコソウ
【4. 3. 24】



▲ホトケノザ
【4. 3. 25】



▲キランソウ
【4. 4. 5】



▲トキワハゼ
【4. 3. 25】



▲ヘクソカズラ
【4. 8. 9】



▲ツユクサ
【3. 8. 27】



▲イタドリ
【3. 9. 25】



▲ホトケノザ
【5. 3. 11】



▲ノコンギク
【3. 10. 17】

外来種

この報告書では、おおむね比較的新しい年代に国外から持ち込まれた新帰化植物をいう。



▲ヘビイチゴ
【4. 4. 13】



▲センニンソウ
【3. 9. 4】



▲カワヂシャ
【5. 5. 9】



▲ヒサウチソウ
【5. 5. 8】



▲セイタカアワダチソウ
【4. 10. 20】



▲ツボミオオバコ
【5. 5. 9】



▲タカサゴユリ
【3. 8. 30】



▲アメリカフウロ
【4. 4. 8】



▲ベルベットピンク
【5. 5. 23】



▲ナヨクサフジ
【5. 5. 8】



▲イモカタバミ
【5. 5. 8】



▲オキザリス(トリアングラリス) 【5. 5. 9】



▲アヤメ
【5. 5. 2】



▲無休菊(スパニッシュエージェー) 【5. 5. 8】

栽培種

家庭や畑で栽培されていたものが何らかの理由で堤防に進出した品種も見られます。



▲ツルニチニチソウ
【5. 5. 9】



▲スルボとアップルミント 【5. 9. 24】



▲ニラ (後方はヒガンバナ) 【4. 9. 25】



▲ジャーマンアイリス
【5. 5. 9】

特定外来種

外来植物のうち、特に生態系などに被害を及ぼす恐れがあり、法律で、栽培・移動等に規制がかかります。地域にも侵入しています。



▲オオキンケイギク
【5. 5. 9】



▲アレチウリ 現在見
当たらず。【4. 10. 16】



▲オオハンゴンソウは以前、団地付近で見かけたが、現在は見当たらない。

現況から見える課題と注意したいこと

●クズやススキなど昔ながらの固有種も繁茂していますが、子どもの頃にみかけたことのない外来種(新帰化植物)が数多く登場しています。●法律で栽培などが禁止されている特定外来種のオオキンケイギクは、鳥羽川や原川沿いに群落がみられます。県では自治会回覧用のチラシが作成されるなど、警戒すべき植物とされ、地域での共通認識が必要です。特定外来種では、アレチウリも数株が栗野台付近の民有地に見られます。●特定外来種ではないものの近年見られるようになった外来種の中で、数株のヒサウチソウを発見しました。半寄生植物なので、生態系に影響を及ぼすことが懸念されています。●また、ナヨクサフジは、10年ほど前から、急速に繁殖エリアを広げています。見た目にきれいな上、レンゲのように根粒バクテリアを持ち、土にすきこむと分解して施肥効果が高まる一方、蜜もレンゲ以上に採れると言います。さらに、雑草を寄せつけない力が強力であると言われます。それだけに、在来植物を駆逐する恐れを危惧し、根から引き抜くことを呼びかける環境団体もあります。

●川沿いは住宅地だけに、栽培種も見られます。スイセンやムスカリなどの球根植物やハーブの種類など丈夫な品種が育っています。栽培種だけに見応えがありますが、食草と似通った品種もあり、毒をもっているものもあり、食べられる草と間違えないよう注意が必要です。



▲セイタカアワダチソウに負けずと繁茂するススキ。

オオキンケイギク植生図

(2023. 5. 9 現在)

多年草のオオキンケイギクは、来年以降も生えます。種でも増えます。強靱なため、在来の野草を駆逐し、景観を一変させるため、特定外来種として栽培等が禁止されています。



▲黒木橋下流。堤防脇に生えている株。

中学校



▲寺内橋のたもとに生えるオオキンケイギク。群落を形成しつつあるが、除去作業で近づくのは危険。

※植えないこと、可能な範囲で除去することが望まれる。
※県が作成した特定外来種に関する自治会用チラシ参照



特定外来種だと思いきや、準絶滅危惧種でした!!

“カワヂシャ”が生えていました。

準絶滅危惧種は、植物では、シラン、チョウジソウ、フジバカマなど、動物では、タニシ、フナ、ドジョウなど。



【市環境保全課に確認したところ、植物の専門家の見解が寄せられました】

- ・カワヂシャは河川や水路、池等に生育する植物で石田川流域にも多数生育しています。
 - ・全国的には、環境省レッドデータブックで準絶滅危惧種に指定されていますが、岐阜市を含め岐阜県内には多数生育しているためレッドリスト(絶滅危惧種)には選定されていません。
 - ・岐阜市内ではカワヂシャ、特定外来種オオカワヂシャともに生育が確認されています。
- また、岐阜市内でも両種が混生するような場所では、雑種のホナガカワヂシャと思われる個体も見つかります。
- ・これまでのところ石田川において市の調査でオオカワヂシャは確認されていませんが、今後侵入する事も考えられます。これからもカワヂシャを見守っていただければありがたいです。

どこが違う？

在来種のカワヂシャと特定外来種のおオオカワヂシャはよく似ています。見分け方は、鳥羽川の個体は、花径が3~4mmですが、おオオカワヂシャは、花径が7mmほどで、花色の薄紫がやや濃いこと、葉の縁のギザギザが細かいことなどの違いが見られます。両者が交雑したホナガカワヂシャ(カワヂシャよりやや大きめの赤っぽい花)は繁殖力もあり、遺伝的かく乱を起こします。



▲特定外来種のおオオカワヂシャ



▲交雑種のホナガカワヂシャ

要注意外来種か、絶滅危惧種か??

マメダオシかアメリカネナシカズラか?

マメダオシと思われる個体に、平成5年の秋から初冬にかけて出会いました。マメダオシとアメリカネナシカズラ(1970年頃に東京府中市で発見されて以来、全国に拡大)は、非常に見分けが付きにくいので、特定に至りませんでした。前者は、ヨモギにも寄生するようです。後者は宿主を選ばないようです。どちらも通常は、夏場に咲くのですが、温暖化のせいでしょうか、12月になっても開花していました。

60年前に長良川川原で出会ったマメダオシと同じ感覚があるものの、両者の区別は難しい。雄しべが花冠より短めであることも、マメダオシの特徴だが、微妙。混雑種もあるかもしれない。

ちなみに、マメダオシなら、絶滅危惧 I A類です。

一方、アメリカネナシカズラは、要注意外来生物です。

一年草のため、再度出会えるかどうかわかりませんが、発見したら、再確認したいと思います。

同年、在来種のネナシカズラも、長良川河畔で見つけました。こちらは、色合いが異なるため、特定しやすいですね。



上の3枚は、マメダオシと思われる個体。
右下が、長良河畔で見つけたネナシカズラ。色が違いますね。
しかし、アメリカネナシカズラは、色もマメダオシとそっくり。
区別が難しいです。

クズの花

旺盛に繁殖するクズ。根はくず粉になりますね。

しかし、開花に巡り合うことはあまりありません。葉の下に潜り込んでいるせいかもしれません。その葉にも個体差が見られます。

団地の貯水池の周囲にもクズが繁殖しています。そのネットに高く這い上がったクズだけが、沢山の花をつけていました。横ばいで成長するよりも、開花の条件が整っているからかもしれませんね。



▲貯水池の高いネットに這い上ったクズは、沢山の花をつけていました。鳥羽川堤では、葉は生い茂っていますが、花に出会うことは珍しいのでは？

